

鳳誉鸞州撰『了誉聖罔禅師絵詞伝』乾・坤

— 解題と翻刻 —

鈴木 英之

『了誉聖罔禅師絵詞伝』（乾・坤全二巻）は、浄土宗第七祖・浄土宗中興の祖として知られる了誉りょうよ聖罔しょうがい（一二三四一～一四二〇）の生涯を、仮名まじり文の詞書きと、豊富な挿し絵によってつづつたものである。鳳誉鸞州撰、無量山沙門了道画、文政五年（一八二二）刊本。

鸞州の序によれば、文政二年（一八一九）に聖罔禅師の四百年遠忌を迎えるが、教化にあたり適当な伝記がなかったため、新たに作成することが小石川伝通院で決定された。そこで、鸞州が伝記を選述し、伝通院配下の僧・了道が、聖罔ゆかりの土地をめぐって実見したことを描いたという。撰述者の鳳誉鸞州（一七七二・一八四三）は、当時のアイヌ人教化の第一人者として活躍した人物で、福田行誠の宗学の師としても知られる。鸞州は、かつて伝通院で学んでいたことから、執筆の任を与えられたものと考えられる。

了誉聖罔は、暦応四年、常陸国（茨城県）久慈郡巖瀬城主の子として誕生した。恵まれた出自にあつたが、南北朝の動乱の中で父が戦死。一族は没落し、母とともに逃亡・潜伏生活に入った。その後、父の菩提を弔うために八歳で出家。了実（浄土宗第六祖）、蓮勝（浄土宗第五祖）、定慧（鎌倉光明寺三

世)ら名だたる浄土教の学匠たちから浄土宗義を学び、またたく間に自らのものにしていったという。そして二十五歳の時に、浄土教学をさらに深めるため兼学の旅に出発。さまざまな師のもとをめぐり歩き、諸宗派の教学はもちろん、神道や和歌に至るまで精力的に学問を修めていった。

三十七歳の時に兼学を終え、常陸国へ帰郷。瓜連常福寺を本拠として浄土教学の整備に専念し、伝法制度を確立するなどして、当時低い地位におかれていた浄土宗の独立教団化の基礎をつくりあげた。昼夜を問わず勉学に励み、明かりのない闇夜でも、額にある三日月形の相から放った光で書物を照らして読んでいたとされ、「三日月上人」「緋月上人」ともよばれた。

最晩年には、常福寺を弟子の了智に譲り、聖岡の困窮をみかねた西誉聖聡(浄土宗第八祖。増上寺開基)の招きにしたがって、江戸小石川の草庵(後の小石川伝通院)で隠居。応永二十七年(一四二〇)九月二十七日、八十歳で遷化した。聖岡は、まさに浄土宗中興の祖と呼ぶにふさわしい大学僧であり、その生涯は、浄土教学の整備・確立に捧げられたのである。

聖岡教学は、近世の浄土宗教育(檀林教育)の中核にあつたことから、聖岡は高く讃仰され、多数の伝記があらわされた。本書は、文政五年(一八二二)刊と、近世末期の伝記であり、それまでに作成された聖岡伝の集大成的な性格をもつ。それゆえに、現存する諸伝のなかでも、伝説・説話的要素が著しく付加されており、とかく異説・異伝が多い聖岡の伝記を考察するうえで、欠かすことのできない基礎資料のひとつとすることができる。

なお、本書は『続帝国文庫』四九(博文堂、一九〇三・五)においてすでに一度翻刻されているが、

誤字・脱字が多く、挿し絵も省略されるなど、精読には適さなかった。そこで今後の研究の便をはかるため、筆者架蔵の一本をもとに、特徴的な挿し絵をいくつか加えた形で新たに翻刻紹介を行う。

【書誌】

- ・文政五年（一八二二）刊。無量山蔵板。筆者架蔵本。
- ・縦二六・一cm×横十七・九cm。袋とじ。乾卷、四十七丁。坤卷、三十五丁。
- ・乾卷には「三縁山大僧正騰誉実海」（伝通院四十九世・増上寺五十七世）の識と「至誠院大僧都鳳誉鸞州」の序が、坤卷には「無量山光雲台主惟誉玄迪」の跋がある。すべて文政二年の記となる。
- ・坤卷末に「無量山総境内図」（長谷川雪旦画）、「無量山宝永年中之古図」が附される。

【凡例】

- 一、翻字は、原則として通行の字体を用いた。
- 一、行は追いこみとし、句読点・字下げ・改行は、原則として底本の体裁にしたがった。
- 一、割り注や細字は（ ）で括って示した。
- 一、底本は、すべての漢字に読み仮名がふられているが、一部をのぞきすべて省略した。
- 一、識・序・跋は省略した（『続帝国文庫』四九に翻刻がある）。
- 一、挿し絵は特徴的なものを選択し掲載した。レイアウトの都合上、一部分本文と前後する場合がある。



了譽聖罔 (一三四一~一四二〇)

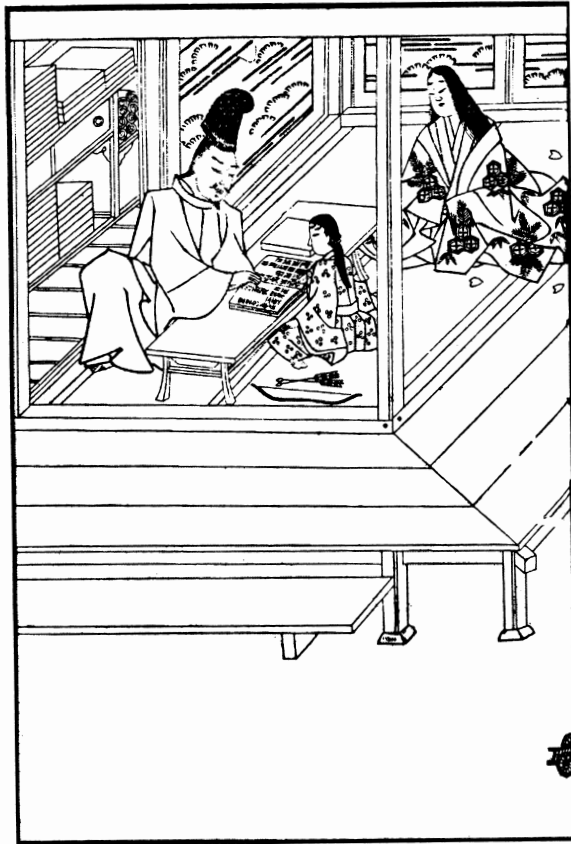
傳通
開山

了譽上人繪詞傳
乾

了譽聖岡禪師繪詞傳

禪師、諱は聖岡。西蓮社了譽と号せり。常陸乃国の人なり。父は同国久茲郡、巖瀬の城主、白石志摩守（源姓）宗義。新羅三郎義光の後胤にして、佐竹の氏族たり。母は橘氏の女なり。宗義盛年を過て、世継なきことをうれひ、夫妻心を一にして、偏に冥の加祐を仰き近きわたりに跡をたれ給ふ。巖瀬明神は、和光乃威權、いちじるく、いまそかりければ、殊更に一七日を要期して、歩みを瑞籬乃内にはこび、社頭にぬかづきて、懇禱の誠をぞいたされける。

神明その精誠を照覽ましくけるにや、第四乃夜にあたりて、掲焉げちよんの靈夢を感ぜしが、幾程なくして、橘氏妊娠を覚ふ。遂に光明院の御宇、暦応四年辛未正月二十五日、巖瀬の城中にして、男子を平産す。父母喜びもてあそびて、あたかも掌上の玉におなじ。誕生の地におゐて、後世一字の精舎を建立し、誕生寺と号す。〔廢城の跡荒原となりしに常福寺十八世真譽相閑上人その故墟をとめて草創ありしなり〕師誕生の時産湯に用ひし泉あり。誕生水と名く。服するに効驗多しとて、土俗来りくむもの、今にたへず。所生乃幼兒其さま凡ならず。面に光彩ありて、聡明倫にこえたり。頂骨高く聳え、額に緋月せんげつ乃形をあらはす。纔に襦袢をはなれて、起居余兒に群ぜず。犬をはせ鶏をたゝかはしむるの戯れを好まず、かりそめの手すさ



幼少期を巖瀬城で過ごす。

ひにも、文筆をもてあそび、諸芸を習ふ。日を間に遠近をわかち、帙をひらひて、之無を違ることなし。いかにもおひさき頼もしく、家の風をもふかせてしかばと、二親の兼かねことも、げにとぞ思はれける。

幼児五歳の時、兵乱乃事ありて、四境堵を安ぜず。程なく敵軍寄来りければ、宗義むかへ戦ひ、武備森然たり。両軍相さゝへて、いまだ雌雄をわかつざりに、流矢来りて、宗義の喉にたつ。急処の痛手にこらへずして、落馬せしが、矢疵深くして、戦場に命をおとせり。寄手勢ひに乗じて、せめかゝり、先を争ふて殺到



父・白石志摩守宗義、戦死する。

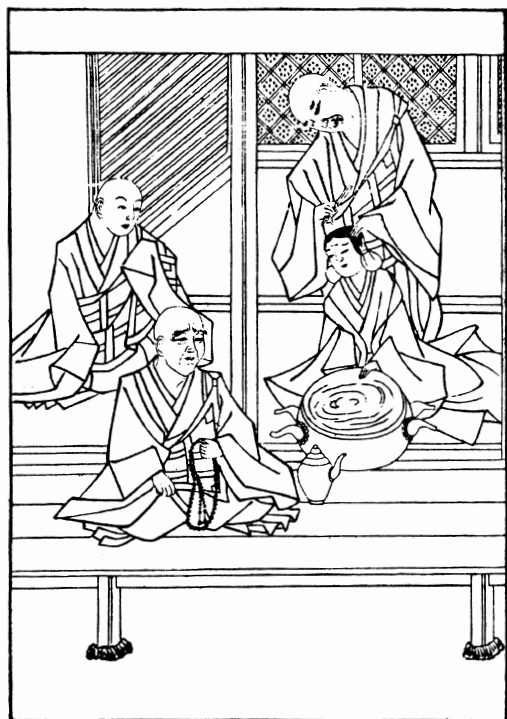
す。味方將師を失ひて、戦ふに力なく、士卒つゐえ散じて、隊伍もとゞのはず。かゝりければ城に守りの兵なく、敵軍みだれ入たり。家族の老幼今は防ぐに術なく、立のくべきに定まれり。母堂は幼児を携へて、そこともしらず落行きぬ。相隨ふ男女、数人には過ぎりけり。へ此時天下南北兩朝に別れ常州は兩朝の徒諸郡にありて干戈やむことなかりき。幼児の五歳は貞和元年にて南朝の興國七年なり。去年北畠親房卿当國閔城にありて賊軍の為に敗られ奥州白河の結城親朝に援兵をこはれしこと諸記に見ゆ。此時宦軍瓜連に楯籠れり。岩瀬とは地境相接せり。今の兵乱恐らくは此折柄なるべし。然るに宗義は南北朝何れに属せしやしり難し。当時水府の藩中白石氏も佐竹の一族なり。同家に古文書数通を蔵す。其中に觀応二年尊氏將軍より賜ふ書に、於常州離一族中最前馳參御方云々の文によれば白石氏初め宦軍に属し此時將軍方になりしと見ゆ。但し志摩守亦爾なりしや計り難し。又同國那珂郡田谷村に（岩瀬を去こと二里計り）旧壘あり。土人白石の城と云。或説に昔時白石志摩守住せられしが額田氏の（佐竹の族同郡額田の城主）為に滅ぼされしといへり。もしや志摩守居を田谷村に移し額田氏の為に滅ぼされしにやあらん。但し記録の証とすべきもなく口実のみなれば定説をなし難し。旧板の師の別伝高僧伝等も其処を註せず。されば今の兵乱の地並に落城何処といふことしるべからず、偏に後人の考正を待のみ）

かくて資財尽く他の有となり、田園は皆敵に没収せられぬ。山林に狼狽して寇をさけ、民家に潜匿して身を保てり。うきが中にもとゞまりて、隙行く駒の足はやみ、うつりやすき月日の影、心細き籠門の烟り、しづぶにつたふ玉水の、ながめさびしき軒乃日めもす、木の葉をさそふ山嵐、羽ぐむ袖のせまき夜すがら、小児の黒髪かきやりて、かはきやらぬは懐旧の涙なり。



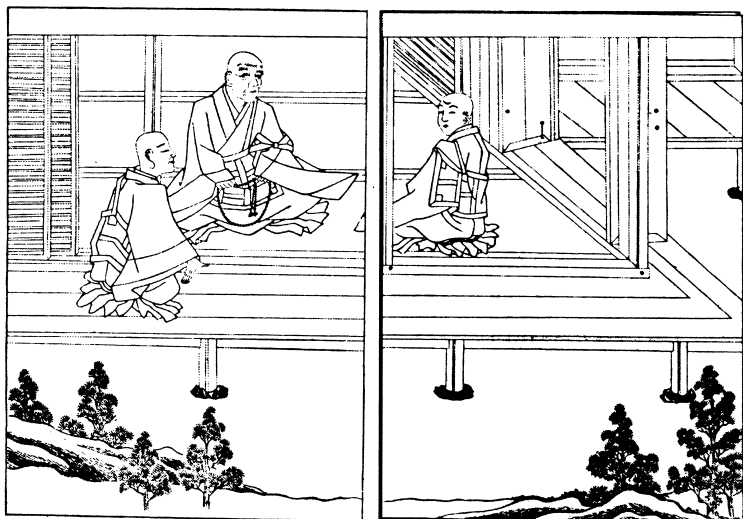
聖岡母子、山里で潜伏生活をおくる。

山里の棲居も花紅葉にかぞふれば、已に三歳を過ぬ。母堂は故志摩守戦死ありてより、人目をはゝむ身にしあれば、供仏施僧の営みも、心の外にをろそかなり。聞き道にやたどり給ふらんと、思ひやるさへ胸いたし。又此兒乃さまたゞ人とも見えぬを、徒らに田夫野人の中におひ立なは本意なかるべし。まして宿世つたなきみつから、後の世をさへ、二世不得の身となさん心ぐるしさ、こしかた行末をなげき思ふにつけても、実や瓜連常福寺なる了実上人は、浄土の先達真宗の棟梁として、智道のほまれ四海にみち、慈忍の徳一時をおぼへり。あはれ此兒を奉りて、亡父の菩提を吊ひ、我こん世もはた頼もしからんにはと、兒を伴ひ、常福



聖岡、了実のもとで剃髪授戒する。

寺に詣で、上人の見参にいり、志の程を述べ給へば、上人承諾して、やがて師資の約をなし、日をへて、剃髪授戒の式を行ひ、聖岡とぞ名づけ給ひける。時に年八歳なりき。母堂は日頃のありましながら、棄恩入無為の砌に臨み、過にし人乃別れさへ思ひ出られ、真実報恩者の言の葉に、露かかれとはしら玉の、悲喜乃涙今更袂ぞぬれまさりける。上人語りて曰く、われ前の夜夢に虚空蔵菩薩の来現を感じて、意こころにあやしみをなせり。今此俊兒を得て思ひ合さる所あり。菩薩の靈告唐捐ならじ。他日長夜の法灯をかゝけて、苦海の迷途を照さむものは、かならず此兒ならんとぞ申されける。



聖岡、太田の蓮勝から 浄土宗の教行を相伝される。

し。宛も空谷の響きを惜まざるに似たり。資敬ひうけて余滴をもらさず。偏に一器の水を一器にうつすが如し。

上人試みに三経一論五部九帖を授らるゝに、いく程ならずして、訓詁皆通曉せり。十一歳にいたり自ら経疏を閲して、粗疑問をあぐるに、慧解天縱にして、義趣深遠なり。爾りしより博く百家の書をひらき、あまねく内外の典を習ふ。年志学に及びて、切に囂塵を厭ひ、偏に閑寂を甘ず。膏油ひかげに継で、経論の幽致をさぐり、寢食やゝもすれば廢して、仏祖乃教旨に、随順せむことを要せり。欣浄の床には、一心専念して、四修の護りをこそかに、奉律の窓には三業ならべて防ひで、十惡の園に臨むことなし。

上人かくて師乃学窓年を経て、智解のさきら、劍をとぎ、精修功をつみて、道業の光り玉をみがくを見て、竊に思はれけるは、彼器量を計るに、我等が指南すべきものにあらず。諺にいへる、象兎は兎徑に遊ばしめずとは是ならんと、太田乃老師蓮勝上人の許に送りて、宗旨の教行を相伝せしむ。勝公目撃して懐に愜ひ、教諭深切なり。歴代の教義一宗乃秘奥授受の間、師資相得たり。師付属して残すことな

蓮勝公又示して曰、菩薩円頓乃妙戒は、山家の至宝なりといへども、吉水大師その正統を継給ひてより、我蓮門の家珍たり。体相受隨の間、箕田の定慧公其奥旨をつくせり。予稟承の身なりといへども、老邁にして、恐らくは、廢忘する所多からん。仁者なんじよろしく、慧公に隨ひて、口授を審にすべしと、申されければ、師其命に隨ひ旅よそふひをぞせられける。上人挙状を定慧公に贈らる。其文云、

此聖罔なる僧智徳逸群なり。定めてこの化来乃

人なるべし。愚下に於て憚り多し。仰ぎ願はくは、尊

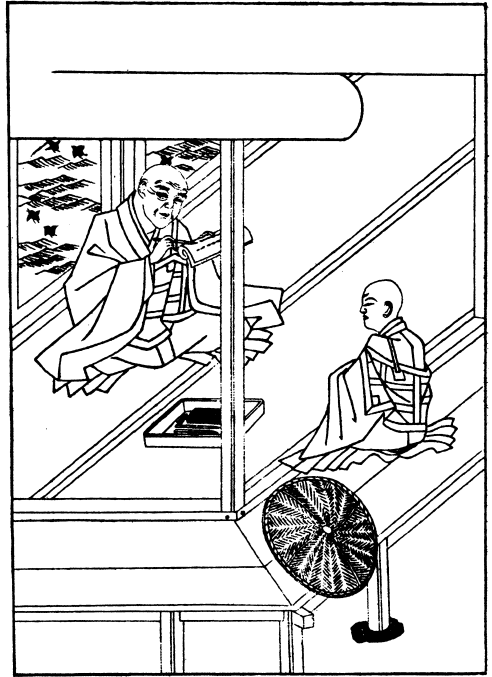
下にして、指南あらば、末世の導師たらんもの乎。

于時延文三年

太田蓮勝

定慧良誉上人

とぞかゝれける。上人もたゞ人ならぬに、筆をとりて、かく讚ぜられしは、定めて内鑑冷然の故なるべし。師は日頃函丈乃恩顧深く、師資の芳契あさからねば、別れに臨みて、余波なごり尽せずといへども、求法の重任なをざりならず、火の中もわけて行なん道なれば、やすらふべきにあらずと、三衣一鉢飄然として、上人乃座下を辞せられける。かくて遙に定慧上人武州足立郡箕田の蘭若を訪ふに、慧公はすでに、箕田を退きて、光明寺に移住あり、これによりて、鎌倉に赴るゝに、近頃此をも遁れて、桑原の道場に隱居をなんし給へりしかば、亦も跡をとめて、錫をぞ振はれける。



蓮勝、定慧への挙状を聖問に与える。

定慧公ある夜夢みらく、文殊大士白毛乃師子に乘し、左手に一巻の經をとりて、あらはれ給ひ（經は了義一切經と題せりとぞ）告ての給はく、明日午時に東方より僧乃来るあるべし。即ち我分身なりと示し畢りて、隠々として見え給はず。夢さめて奇異乃思ひをなし、翌朝門人に命じて曰、今日禺中に客僧の来ることあらば、速に我につげよとありしに、果して師錫を曳て至り給ひ案内をこふて、蓮勝上人の書翰を呈し、座下にありて、請益せんことをぞ、求められける。定慧公書翰を披いて、聖告のむなしからざることを信じ、さそくよびいれて、対面せらる。法門の清話往復景をうつすに、其穎悟神彩なること、一隅を挙げば、三端をた

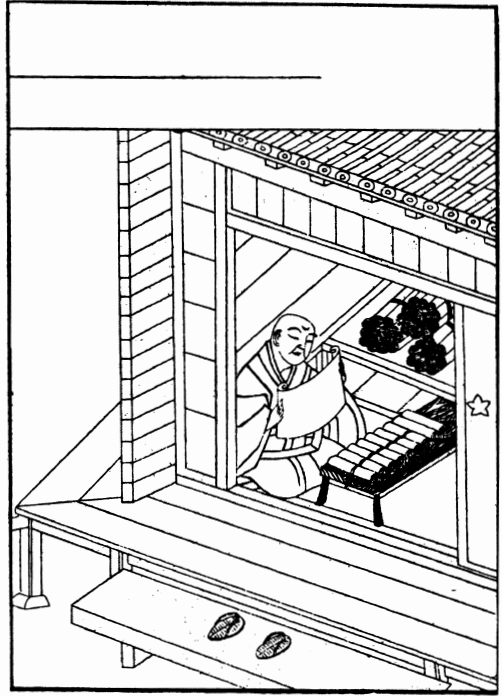


定慧、文殊菩薩から夢告を受ける。

て、定慧公は法器を得て、宗教のよするところあることを、喜ばれけり。

定慧公、翌日より講席をひらき、浄土乃経論教相行儀並に起信釈論等を演説せられけり。師飡受して循環研覈し、自他の鈔疏其微旨を得ざることなし。緇素預りきひて、ひとしく法雨にうるほへり。定慧公或時述聞鈔を授けらる。師受よみて其要旨をさぐり、自得の趣を記して呈せらる。定慧公披閲して、宗意乃骨髓を得たりと、印可せられければ、諸人その宏才を讚歎せざることなし。

定慧公其成器を見て曰、予此書の記をつくらまく思へども、老後朽邁せり。氣勞し体うみて、いまだ果さず。幸に仁者此挙あり。よろしく潤色して後学を益すべしと、勧められけり。師今年弱齡なり。他乃批評を恐慮せられしかども、利物の師命黙し難く仁に当りて、ゆづるべきにあらねば、やがて師説を挙揚し、己が領解を附して、口決鈔をあらはす。是述



聖岡、大庭山往生寺で一切経を披覧する。

作の初めなり。

定慧公深く器重し、肺肝をひらひて口授せらる。かくて二祖三代乃宗義行相、及び円頓菩薩の大戒附属余蘊なく、粟承円備せり。浄土の伝灯此に於て、光りをます。時に師二十五歳なり。

下野国芳賀郡遅沢、大庭山往生寺に輪藏あり。へ当寺に六坊あり。師は南瀧坊といへるに寓居せらる。師此に就て一代を徧覧せられけり。昼は寸陰を惜みて、慧刃を三藏に游ばしめ、夜は三業を撰して、口称を六字にはげむ。寒暖しばくかはりて、智行かね進めり。



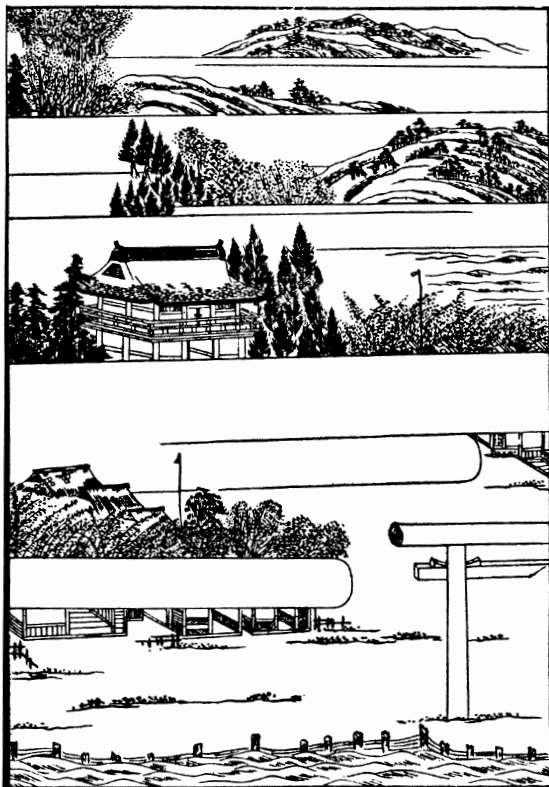
聖岡、諸国兼学の旅に出る。

師竊に思惟せられけるは、浄土乃真門はやうやくその室に入といへども、聖道乃広居はいまだ堂にだものぼらず。抑釈尊西化を隠して、火宅の門にいり、甘露をそゝひて普く群萌をうるほす。閻浮出興乃大意法界等流の真詮、たとへば半如意珠を得て、へむに似たり。牆面の譏りいかでか免るゝことをえん。もし夫解を学ばゞ凡より聖にいたり、徧なくこれを学べと、宗師は指南し給ひ、聖道浄土徧学の者にあらずしては、浄仏国土成就衆生のことほりをしり難しと、鎮西禅師も勸励し給へるものと、憤然として錫をふるひ、笈を千里に負て師を百城に訪ひ、頭密乃玄扉を排き、禅教の幽閑をたゞく。真言上乘の秘奥は、法幢院（常州小松村にあり）祐存に（師の叔父なり）伝へ、天台一実の妙旨は、真源法印に授る。月庵天命の二公に（共に丹

州の人なり）参じて、西天教外の心印をうけ、野州の教養に就て、俱舍唯識の性相をまなぶ。（下野宇都宮
塙に二宗の名匠ありければ師これに学ばる）しかのみならず、甘棠の下をゆかしみ、錫八宗の祖跡に徧ねし、
入定の扉を南山に伺ひて、遙に龍華三会の暁をおもひ、護国乃床を北嶺に訪らへば、鎮に帝都万年の夕を
期せり。七大の法鼓は権実の響きをきく、三面乃僧房は定慧の室にいる。神道の奥義は口決を、権祢宜治部
少輔にうけ、和歌の玄旨は伝授を頼阿法師にきはむ。凡そ教庠に遊歴し、禪苑に逍遙して、東參南詢十有三
年、内外の典籍涉獵して、つぶさに其微をはかり、漸頼乃法門思ひを属して、ことごとく鍊磨を経たり。遂
に道眼円明に、智光透徹せり。爾しより徳終古に高く、声遐方に普ねし。慈悲物に応じて、勸導日にひろく、
緇素心を傾けて、帰仰月に盛んなりき。師剃度の始めに了実上人虚空蔵菩薩乃靈告を感じて、他日に長夜の
法灯をかゝげて、苦界の迷途を照さむものは、かならず此兒ならんと、懸記し給へること、むなしからざり
けりと、今更に貴くこそ。

師応安中京師に遊び、和歌を頼阿法師の門に学ばれしが、六義の幽致を極め、口訣伝授ありけり。其折から
古今序註十卷をあらはす。法師亦淨教の要決をば師にうけられけるとぞ。時に師乃道譽叡聞に達し勅召あり
て、参内せられけり。龍顔に咫尺して、浄土乃法門を宣揚ありしに、智弁並びとみて、道念面にあらはれ、
叡情深く御感ましゝて、芳名九重に施せりとなん。

師常州鹿島安居寺に（今の神宮寺是なり）寓居せられし時、社司乃需に応じて、神冊を講ぜられき。以前に
神道を伝授せし権祢宜治部少輔、師の博識洽聞に伏し、麗氣記の鈔を撰し給はんことを求めしかば、師やが
て述作せらる。其頃無智乃輩諸処の道場にして、事を浄業に托し、異をあらはして衆を感し、或は末学の今



鹿島神宮

按を以て、本宗の正意をみだし、又は聞証の禪和みだりに、聖浄二門の得失を、議するたぐひありければ、諸の邪執をくじき、西利乃直路を示さんが為に、破邪顕正義をあらはす。鹿島の社頭に賓主をまふけて、選述せられしかば、亦は鹿島問答ともよべり。



聖岡、額の三日月から光を放つ（織月上人）。

或時ひとり室内にいませしが、乗燭の比過て、のどかに読書の声あり。何某乃僧あやしみて、うかゞひ見るに、師頂門織月の相より靈光を放ち、曜々として文面の明らかなること、戸隙より日光乃照すがごとし。かの僧身の毛よだちて、貴く未曾有乃思ひをなし、師のたゞ人ならぬをしりて、深く尊崇せりとぞ、仏図澄三藏乃奇跡は、権化の所為さる事なれども、末代にかゝる奇特をあらはずにいたりては、師の内証実に計り難きものか。頂門の相によりて、世に師をせんげつ織月上人みかづきとよべり

開傳
山通

了譽上人繪詞傳

坤

了譽聖岡禪師繪詞傳

師幼学のそのかみより、奉事師長乃志切なりといへども、身を立道たてを行ふ習ひは、心に任せずして遠遊せり。二門の習学に数多の日月を消し、今は解成行遂にしかば、錫を故郷にかへし、瓜連に省覲せられけるに、老師了實上人齡七旬を過ぎて、日虞淵にせまれり。別れ久しふして、対面年をへだて、求法の艱辛覚束なくのみ過給ひしに、師いつしか智道兼そなへて、やんことなき有さまなれば、老眼を摩娑して、蓮門の要旨を商量し、其智行の深詣を讚歎して、列祖乃道地に墜ずして、宗灯のますく輝くことをぞ喜ばれける。師は温涼定省乃孝養をこたりなく、夙夜拳々として、瞻時乃誠をつくされしかば、上人適悦の顔をとき、衆人其至孝に感激せぬはなかりけり。永和四年戊午上人みづから璽書を裁して瀉瓶の許可を授けらる。時に上人七十
五師三十八歳なり。

下総国住人千葉介貞胤は、武勇の名家なりしが、心を仏乘に帰せり。師乃道譽を聞て懇請しければ、彼国に赴ひて、頓教一乗の法輪を転じ他力の秘術を挙揚して、娑婆の厭ふべく、極楽乃欣ふべきことはりをさとし、



聖岡、聖聡を弟子にする。

選択本願の要旨、濁世末代の目足なる趣をのべられけるに、緇素集りきひて、信行の掌を合せずといふことなし。貞胤宿善や開發したりけむ。弥陀願海に歸入して、専修念仏の勤めねむころなりき。次男徳寿丸始めは州乃妙見寺に薙染して、密乗を学せしが、師乃道徳を欽崇して、宗を浄土にあらため、座下に依止す。授戒伝法して、聖聡と号す。賦性温順にして聡慧逸群なり。誠を奉事につくし、心を祖訓に傾け、鑽仰の窓に切磋年を重ねぬ。師も道愛深くして、懇に教誨せられけり。北相馬横曾根の郷光明山本願寺にありて、二蔵略

頌一卷同頌義三十卷を撰せらる。文富義豊にして、一代の綱領を提^{ひつぎ}げ、要をさし玄を搜りて、一宗の体用を尽す。今に至るまで、梅檀林下の学士心行乃要決論議の規範たり。奥書に弟子聖聡に授くとぞしるされける。(同見聞八巻を述せらる)又三代相承の五重伝籍は、善導和尚自解仏願の妙旨を祖述し、吉水大師別開真宗の秘蹟を憲章して、専修浄業の真訣凡入報土の南針なり。師末鈔を製作して是をも一々に口授せらる。其提撕深切なること思ひみつべし。遂に解行成弁して、蓮門の柱礎たり。一宗の教行此人を以て附法とせらる。その器宇卓出して智道の秀たること、準知すべきものをや。後に化縁武州に熟して、錫を江戸に留め、貝塚に於て三縁山増上寺を開創せり。大蓮社西誉上人是なり。福智兼富て宗教大ひにふるひ、操觚百余巻みな浄教の綱要を述るにあらざるはなし。余沢遠くうるほし、奕葉繁茂せり。今に於て依正の隆盛なること、海内比類まれなり。まのあたり余慶をうけて、其高蹤を仰がざらめや。

瓜連に帰省ありてよりは、弘法利人を任として、撰化専らなり。学徒蟻慕して講法むなしき日なく、士庶渴仰して、聴聞踵をつげり。過にし閻蔵の時約諾ありければ、下野国にをもむき、大庭山往生寺南瀧坊にして、法幢を建らる。師儀相人を伏し、智弁機に逗じ、穢土乃無常を示して、安養の快樂を願はしむるに、遐邇の道俗翕然として、草の如くに風靡し、深く厭欣乃宗を仰ぎ、浄業を専修するもの、数をしらず、真宗の興行尤昌^{さか}なりき。撰化の余暇二蔵名目を述す。嘉慶元年丁卯浄土伝戒論をあらはせり。台宗の円戒今は浄土乃律儀なる旨を示して、専修の行者も、浄戒を護持すべき趣をぞ述べられる。其明年定慧上人の命をうけて、伝籍十八通を著す。良順了実二公の連署をこふて、末代に流通す。宗義開発の元由性相兩頓の殿最より、大凡一宗の肝心輯録せずといふことなし。

嘉慶二年二月廿一日、瓜連の民家より失火して一村みな焦土となりぬ。余焰草地山に移りて、本堂坊舎尽く灰塵に委せり。了実上人より附属ありし、紫衣の勅書并に齋邑の券契等あはせて烏有となれり。師奏聞して重ねて紫衣の綸旨を申し、堂塔をも再興せまほしく、企給ひしかども、四來の教化に余暇なく、群籍の著述に寸陰を惜まれければ、上落もあらまし計りにて、土木の功もはたさずしてやみ給ひぬ。抑紫衣の勅旨と緇林の光輝、伽藍の興立は白業の住持にて、等閑に措き難き事なれども、時にあひ人を得てんには必しも難きにあらじ。唯いたましきは、眼前に無惡不造の凡夫惡道乃巢もりとのみ悲しさを說法無間の業も轉じて、教訓の言下に、弥陀本願に帰入し順次に報土の往生を遂しめなんこと、其益いくばくぞや。
もしいちにんぐをいでじょうどにしようするものあればこれしんじつにおんをほうずとなづく
若有下一人出レ苦生ニ淨土ニ者上是名ニ真実報ニ仏恩一とあれば、說法度生尤要益なるべし。又述作の道容易ならざるはさることにて、凡入報土の妙法輪は、独り格外に轉ずれば、口伝なくして、淨土の法門を見れば、往生の得分を失ふといへり。列祖の相承によらずしては、自利々他実に難かるべし。されば、相伝の法門を輯録し、祖訓の趣を以て註釈をなし給はずんば、後來の心行何にかよらん。我今不レ記將來可レ悲と、章安大師の述懐せられ、將來の痴闇をおもふに、肝腑やすからずと、鎮西禪師の歎息し給ひし。みなこれ大悲の御言葉なりけりと、貴くこそ覺ゆれ嵩明教の利とうせい於を當す世はせつ無はせつレ如はせつ說はせつ法はせつ益はせつ於を後はせつ來はせつ專はせつ在はせつ著はせつ述はせつと申されけむ。

今師も万般をさし置て、此二事を専らにせられしは、智者の所見古今一轍なるものおや。
瓜連回録の後興復いまだならず。師瓦礫場に法輪を転して、本願の密意を広宣し、草茅廬に文房を弄して、末代に要法を開示す。応永二年乙亥十二月十九日、伝通記糅鈔四十八卷を編集し畢りて、奥書に云、初自
明徳四年癸酉十一月十二日至今日三年之間糅傳通記十五卷之自他私鈔三本鈔勒之已。その末学の為



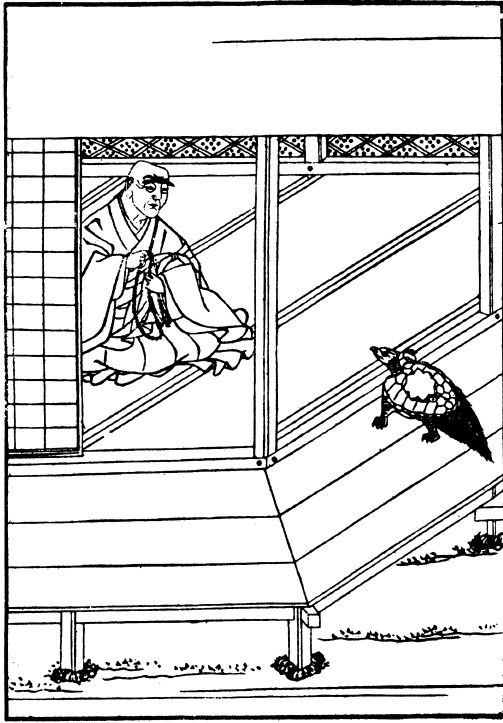
聖岡、不軽山の巖窟で述作に励む。

に身心を歳月に労して、述作せらるゝこと、斯の如し、明年丙子四月廿三日、選択決疑鈔直牒を集成せり。始め筆をたつるの折から、佐竹義秀の兵乱ありて、民間みな荷担して、たてるさまなり。されば聖浄二門の学徒衣鉢を托するに所なくして、諸国に離散せり。師も故入難処の仏制あれば、兵戈の際にあらんもよしなく、単身笈を負て、州の阿弥陀山に隠る。へに不軽山と名く。常不軽菩薩応現して仏像を彫刻し給ひし靈蹤といへり。此山に巖窟ありて、南に向へり。太陽乃光りをうけて、窟内明らかなり。師此に籠居して道業純一なり。徒弟なければ教育の営みに勞せず、士女詣て来らざれば、接待のわつらひなし。わづかに乾柿を

携へ行て、餓に備へ、一鉢のしばしば空しきをかへり見ず、巖もる水を硯にしたで、毫をうるほして、紙にのぞみ述作に孳々として、遂に全篇十巻を草しなせり。相伝乃義を以て文を釈し理を成す。教相行儀実の後学の模範なり。乱をさけ跡をかくせし身にしあれば、聖教を携るに便りなし。引文典拠多くは闇記の儘なりとなん。又古人の少引取^{すしひいてぎをとりにしゆもんをもほらにせず}レ義不^しレ專^し守^し文^ととの給ひし類、今師一世の述作にまゝ見ゆ。後世新学其時を鑑みず、師の意を会せずして、引文の備はらぬをあやしみ、詳略一準ならざるを以て、みだりに擬議するは、実に師の罪人なり。夫扶宗為人の志至切ならざるよりは、いかでか巖洞に餓をしのびて、心志を筆硯につくさむ。自余の篇章と雖も干戈の際に往来して、著述せられけむ、其護法利物の慈心小縁^{おほろけ}の事には侍らじかし。静に思ふに一句一字の法門も、祖先の血汗にあらざるはなし。流れをくむの兒孫、なをざりに看過することなかれ。常福寺第三世明譽了智上人は、師の補処なり。一寺を彼巖窟の傍に建立せらる。不軽山莊巖院高仙寺といふ。今常福寺乃配下たり。いにしへは人を思ふて、尚其樹を愛せり。況や祖跡に臨みて、誰か感激のこゝろなからん。

又涇渭分流集、心具決定往生義をあらはし、末学の異義をくじき、本宗の正意をのべて、大悲の極致を敷衍し、往生の捷徑を挙示せり。抑師博聞強記にして眼をふれば忘るゝことなし。言を出せば、義を詮し、筆を下せば文をなせり。一代の著述一百有余卷、みなこれ仏祖の蘊奥を該羅し、心行の枢鍵を發揮す。洞かに頓教菩提の門をひらき、たゞちに超絶易往の道を通ぜり。願生西方の人、よろしく解行の龜鑑に備ふべきものをや。

兵戈しずまりしかば、不軽山より帰寺せらる。師寺務に參預せりと雖も、行履を世事に混ぜず、ひたすら厭



巖瀬村鏡池明神、来現す。

欣を思として、声利の跡をふむことなし。或夜一行三昧乃窓に心を八徳の池にすまし、更たけ人しづまりて万籟簫颯たりし。折しも、巖瀬村鏡池明神来現ありて、法施を求め給ひしかば、師やがて法号を授け、菩薩戒を授与し、本願念仏の法施ありしに、明神斜ならず喜び、納受の形を現し給ひぬ。須臾にして、一の亀あり。背に八稜の鏡を負来りて師に献ず。是すなはち明神法施の徳にむくひ給ふにぞありける。其鏡今現に草地山乃宝庫にあり。師四海の良導たるはさることにて、神明までも帰仰ありけるは、道德の至りこそとたふとく覚ゆ。

聖聰上人増上寺を武州江戸に起立ありて後も、時々師の許に來詣して起居を問訊せらる。或時に曰今道容年たけ給へれば、弟子晨昏に水菽のつかへをなし奉るべけれども、江戸の弘化を一旦に捨去んは、人法の利にあらじと心やまし。あはれ師武江に來臨ましまさば、いかばかりか本望ならんと申されければ、師忻然として許諾し、明譽了智坊に草地山を附屬し、応永二十二年二月二日、錫をうつして江戸におもむき、豊島郡小石川のほとりに、閑寂の勝地ありけるに、草庵を結びて住居し給へり。聖聰上人は、日頃の本意遂られければ常に詣で來りて、孝順乃宮みいとねんごろにまませり。經論を提唱し、要義を商確して、法喜の遊び絶ることなく、宗教を興立し、群生を利濟するの善巧に談話晷を移せり。師資の芳契宿縁の遂所、主となり伴となりて、法化を贊成ありけむこと、あはれに貴かりけり。

其頃のことなりしが、何処ともなく、一人の化女來りて、仏法を求む。師問て曰、授受の際必ず名を稱すべし。汝も是何人ぞや。いづくより來りしやとの給へば、化女答て曰、妾が住居遠きにあらず。氷川の神靈これなり。師の弘法教化を随喜し來れるなりと。師すなはち菩薩の大戒を授け、頓教一乘の妙法を示し給へば、化女歡喜の掌を合せて申さく、かくまのあたり法施にあづかり、深く道味を喰す。何を以て謝し奉らん。我に靈泉あり。供養しまいらせん。阿伽井に用ひ亦度生の縁ともなし給へと、いひ畢りてかきけち失にけり。師あやしみて庭中を望み給ふに、庵近く沸然として靈水涌出せり。是なん法水遠く流れて、普く群生をうるほすの祥瑞なりと、洛東の祖跡になぞらへて、吉水とぞ名けられけり。(今極樂水と稱し地名によへり)師



氷川明神、来現す。

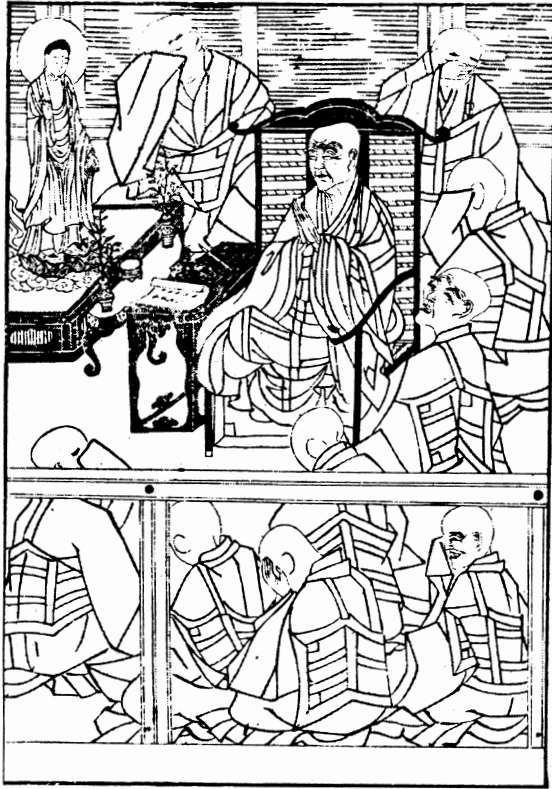
此に於て氷川明神を念仏守護の宮居とあがめ、社壇を修補せられけり。草庵後に精舎となりて、歳月を経しに此泉かつてかることなかりき。御当家にいたり、殊更地境を賜りて、別に堂舎を造営せしめ給ふ。委しく次下に記するが如し。元和七年辛酉六月十二日、松平忠輝卿御母堂、阿茶局逝去ありしに、遺言によりて、最初の祖跡に御葬棺あり。朝覚院貞誉宗慶大禅定尼と号す。是より宗慶を以て寺号とせり。其後此地松平播州侯の邸となりしかば、寺をうつさる。今の極楽水宗慶寺是なり。霊泉もまたうつりて、今の寺境に涌出す。

師今は寂莫の扉に、老骨を淨業に励まし、ひたすら聖衆の來迎をのみ待給へるに、桃李ものいはずして、ふもとと蹊をなし、いつしか徳香四方に熏し縑素したひ來りて、津を問者綿々として絶ざりけり。師遁世はさることながら、さすがに悲心ふかくして、応接せられければ化導再びふるふて大衆輻輳し、檀信催すことをまたずして、いつしか梵刹を創立せり。無量山寿經寺伝通院是なり。爾しより後は、代々有徳の高僧住持せしかば、教を伺ひ行を求るたぐひ年々にたゆることなく、遂に蓮門の叢林となれり。東照神君御入国のみぎり台命ありて、淨土宗に於て御菩提所たるべき寺院を、御尋ねありけるにも、祖師の遺跡たるを以て、伝通院増上寺をぞ申上げる。

師無量山に留錫ありて、六度春秋を加へぬ。穢土の化縁やうやく尽て、淨刹の正因まさに熟し、一夕いさゝか不例にましませしが、自ら往生の時いたれることをさとり、澡浴して身をきよめ、平服を脱して、淨衣に改め如説の行儀を調へて、臨終の道場にぞ入られける。門人に遺囑するに、扶宗護法の任を以し、檀越を垂誡して策修信行の趣を示し、教誨諄々として、聞者感泣せずといふことなかりき。最後に臨みて、繩床に跏趺し辞世の偈を書しての給はく、

放行把住滿八十年即今端的知不識日輝于東

山月西天



聖問、八十歳で示寂する。

書し畢りて筆をさしをき、合掌して高声に念仏し、湛然として示寂し給へり。時に応永二十七年庚子九月二十七日曉なり。道情淳信二尊にたゝすべし。聖衆乃迎接眼にあり。浄業精鍊四修おつることなし。楽邦の往詣掌をさす。嗚呼道容西去不返空望慈雲於曉天之残月法音東留無尽普仰智光於長夜之明灯称光帝勅して禅師の号をたまふとなむ。

釈天察拜書